

荒郊子

七





一 永年中紙言光國卿を頼房々の第三の子 東照宮の側近也寛文十三年頼
房々の嗣位を定むるに當りて 廣有院殿の傍に十山備前守信吉水戸
はより光國々々は頼房の長子と定むるに當りて 嗣位を定むるに保二年光國卿
史記の伯夷傳と讀み深く感ずるにありて 嗣位を兄の頼重と定むるに當りて
定りて 長子に方家を譲るに志をうつして 既より是より又學問を好
むるは志篤し 明暦三年の大日史と選に當りて 神功皇后と帝紀を撰け
て 仰りて列し大友皇子と天子と定め 南朝を正統と立らるるは世君の義例に
寛文元年頼房々卒あり 葬禮儀の法を以て 瑞竜山に葬り 威公
と謚し 廟を水戸城中に建らし 祭祀の儀式を定め 殉死を志す士ありし
自かなるはより止りて 其理を以て 殉死を止まりしは 世後必ず殉
死天下に統傳止の旨傳せられ 世君の故に又兄の頼重々の子松千代後乃

と強て養子とせしむる事とて せしめ入りて 其志を遂るべき志なりしは
頼重卿の遺徳に松千代の忠孝を傳へて 引取養ひたりしを以て 明報の遺民
朱之瑜と云し 文学ある者 清朝の粟と食せしめて 日本に渡りて 筑後
柳川の文学何某を傳授けりて 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病
よりて 卒去ありて 其志を傳へて 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病
其志を以て 孔子の堂と水戸に建らし 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病
日本書紀の文章と編て 三十巻とす 天聰三年 天和二年
後西院の命名と松桑栢葉と賜りて 所を以て 師とせしめ 終り 徳方病
朝鮮の使臣にありて 三使進物の目錄禮義と失する故に 三條の疑
問ありしは 言を詞なりて 勅命ありて 鳳足といふ所 碑を築き 作ら
せりて 震事と下し 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病
代名士といふ言ありて 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病
は讓りて 其志を以て 師とせしめ 終り 徳方病

位山のぼろと昔し荒の身き禁の里と伝ふりける

是より陸の名義郡太田の西山より別荘ありて山荘の名松堂
とてふ門垣はききふひり品竹垣一重あり池は蓮と松西山のり桃
数百株あるも川の流の橋と枕橋と名づけ鹿と放ち鶴と飼ふをたふよく
かつきう瑞竜山は壽翁と役け衣冠と埋む碑の跡と自の作の記あり久義郡
小野平村旌徳寺は祠堂と建頼義義家の子神主と金せらる又松列漆川
楠正盛の墓と修し碑と建碑面は鳴呼忠臣楠子墓と自筆し陰は八尋
水の湧し積を彫せらる又舜水の碑と瑞竜山は建らる文庫と海と則
門八源光國と稱し記あり彰考館を作せり和漢の邪書と集らるしは
を國他卿は學士とをりしす故に仍の反古ととるを随拾を記ひ可ひる
ふふふの書も編集あり中ととて紀典類聚五冊を日本古来ありの
定典と稱へしといつゝ寛文五年以中河内瑞相三千八百段ちよん新地の
寺院九百九十七除き多河郡を彦野ありしは馬と放ち牧となし記あり

地の利とては御山とてきき海參白魚昆布とひ派瀬とてきき海は蛤
を散し是も海國多くお山もきき漆楮多し杜さき記ひり元禄十二年西山に
述去あり義公と謚せしと也

一回君の遊幸の年の夏の末は郭公の鳴くともはつたされ

はとくきひかれとひとくきさびしきと我とてさくは山荘は

そと山前河原の面は水の介は細く水は柔いうと中ありしと又同年秋

西山やいるこの月のふかふかと志し宿める庭のかき

一回君門への月京都杯を宴とめしといふにきき事これなし京そのふは
もと大名小右いなる由家もあらき女のお魚と撰せし三人或き五七人
十人餘とて京都が中とを抱はる水戸の所家は語つておねなるも公
人海一人となしと人共いひつり——とをたふはれり又子の所名は
者もけくはおねなるもけくはとておねなるもけくはの事より又子のる
うとくなるものおねなるもけくはとておねなるもけくはの事より又子のる

元禄年中遊行上人水戸へ参りて此の如く實盛が禮貌を尋ねしに
 西公は内侍を遣ひて其の如く云ふ事なりと云ふに實盛は源家の士として平家
 降参ししに武田何程有るかと我も源家な色をも心の侍の武具多うと信迎す
 あらばと相見せしに又或年三升一返と申人内侍殿とて江戸を廻りて参りしに
 ゆゑ暫く逗留は致しければ内侍の奥より平家を告げしに拒絶が言
 の事也西公公ぞ云ひて信せざる事源家が見えぬとあや—んて尋—子討
 るやあらんとしつと申て平家に涙を流しける事いうまじや戦場は勝んで
 死と一途は極ても不敵あらばと仰いおとる事—きねは平家は涙を流し
 腹のなる事不要候也武士の事を上げちれば子の縁の爲なりといふ事—
 是又心持は深き事ありあひしてゆきて引留めりて—いそ今く私の爲に進退
 —し君の爲に忠節と海人心を痛斗と云ふべ我々が和洛を天下の大事と
 あるる事や縁を別具しを拒絶し期は降さず望み—し討死させ彼等を屍
 と目の前より見せ笑をふみて皺腹を窓を明け目—指し母をんかんと

せも美大なる天恩の万命の一とて報びるまであるべしと相成り色々と相成り色々と相成り又門下
智恵の御前を老たす對し申上りし事これハ昔或國に酒屋あり酒の酒屋は
酒の外他は皆人世酒を求むよりこそ最良なりと云ふ所家父は酒の大いにつとなく人
々此大なる酒買ふ来る者といひてくみ付たり酒の飲んども彼大といふやう
思ひ酒買ふ来る者いつとなくつとてそ家父へくまじし中事ありする
ないも能くして人々此大なる酒買ふ来る者といひてくみ付たり

日向山つきの良板垣宗膳卿前より多く程言はぬ大君と申者も各別所
 懺忍せいの強き物なりとくり返し「ヤセー」とぬふ言ひを以て何とし
 る事ぞと此後ハ宗膳中より「それハ拙者づきのや」云々者も何と云と
 尋ねて拙者ハ敵の用を修する事大君と申者もそれの役人は此後
 付はぬ急は申入用しぬふ言ひも又速に用する事或ハ二時或ハ三時と申
 さまは拙者の言を懺忍し「びんき」云々の言ひも「ハ」ぬふ言ひも又速に
 時宗膳中より「是も程懺忍しぬふ言ひも又速に用する人の信らぬ事ぞ

一 或時内前板垣宗勝本尚謀 傷患し ほどお告の故山公は信おのハ世より
来處と申の心風と云ふにこれに病人と云ふことなき病なくして此論を記
し者あると云ふと云ふ遠くより一と云ふは

一 明曆三年丁酉四月江戸大火より水戸の山屋形も焼失しぬ其年の五月の
節は 相模原うけぬ事ありて江戸の家やうせぬやうく火とのやを

戸田舎よりよきと云ふは 光國

おのつうと云ふはあけとくやんといふきー等の庵と
とありしをいし時をいといふて面あき事一と云ふ

一 西山公の編集或は新撰或は補補或は後世の助にあり事と云はれ或は
録後板の書或は古来よりせよと云ふ事と云ふは 此れは公の板行に依りて
其書数々あるに記 書加ふ

日本史記

礼典之類聚 恒礼 五石巻

杖桑拾遺集 二十巻

保元平治物語 卷

源平盛衰記

源平盛衰記 卷

太平記 卷

神道集成

萬葉集解

澤宮日記

新編源氏物語

卅五箇珠

花押藪

新編源氏物語

水城寶録

家来日録

視聽日録

六國史

都史文集

惺窩文集

洪武正韻

南朝事跡

田村九事跡考

楠記事

成憲摘要

新撰年中行事

歴代大臣考

月卿初任

記録年代考

諸記年月考

日次記考證

慎終日録

新撰文集 目錄附

日語集附録 目錄附

張蔣詩文 年譜附

張鼎文集 年譜

霞池省卷 簡 遠菴 稿

和漢松梅百歌

日採録

萬葉類句

萬葉目年

山吹日記

新撰近代帝系

系譜補

甲子紀行

近代詩士傳畧

西行雜錄

南江雜錄

続南江雜錄

諸國土宜備考

金沢蠹餘殘編

和蘭譯語

雜錄

書法纂要集法

致祭儀節

桑鮮筆語

瑞竜墓集祭誌

礼樂疏款尊儀

啓聖公相祀

萩奠儀儀解

改定儀注儀解

祠堂時祭儀解

墓祭儀解

朱子語編

文苑雜纂

細山公卿一代の中あそびし山内侍文並み山崎氏と山瀬去の後綴條々

此条より歌三才卷の書とありき

常山文集 二十五卷

常山御抄 五卷

一 寛文五年己酉二月戊の別大坂の御天守北の鋪の邊に雷為天守ライ火より

は焼たれし其時門前山崎重宝の金の扇の門馬市天守の三重目より有るが懸

焼たれんと志すも危急の場なりあり誰も命を捨て是とわかれんと云者

なし御ある水煙をあたると云者進んで我命を捨て是とわかれし事んと受け

きども山崎代主山崎備守と様とて何しと云は是と感じ別とあると云は是れ

奥の難なく所馬市と取出し相見んとしりる火を燃えあつて天守より下りる

事ゆゑなりきども三重目の窓を叩き命を捨て死なりと云天運や強

かりん命つぎよく後付ることを世に語りて將軍殿は感佩し其の

八百石加恩と賜ひ千石の身上にめてお給ふに至り勤仕に

一 松平新右衛門光政永年十四より一七歳の時或夜七時より寢たりとあるより

翌朝御側の老女候様を御ひお見せられしに御殿より下りてお見せ

られし別の事なりとなし我大由と仰して懸す十四歳より色えたる一と云

と云ふべきと云ふ事今偶せざるより然るに其のつけを承けしと云ふ

治る難しと難し老女學問より御を聞てありと云ふ事ありと云ふ

代より漸々入ると云ふ事は其の事なりと云ふ事ありと云ふ事あり

一 如美の藤田家より毎八丈寛治の家子孫のゆへに資用のためは小金

幾星丹藥家包そ外環細の物件定数ありて月録の如く公遣の官吏に
付して八丈島へ遣へば箱如賀^{箱如賀}ありし時をいふを故老子訓は次
格を更といふ者より託する事なり豊後太閤の時前田家の先祖大納言利
家の女と太閤養女と一淳田秀家は婦人は秀家の夫人なりし御女は養長
と中國の原師教とて後秀家より石田方へ渠料とて死罪と知れら
るべかりしと鴻津家のと哀れよりて死一等と減して秀家より子
八郎八丈島へ竄逃せらる八郎は乳母ありたるは是等とて逃去ぬそ
女の女房とて俗にさし八郎が知れしと乳母は難きとてさし一少子とてとて
かく匿れしと後脱して官廳へ詣り志する八郎はつてさし到
らんと乳母の色とて制村ありし様は是とてさし女房以上何の
為にすてありむと様は自殺せんとあると家吏あつて誅しるる
け女房も目録より見難しなむ後よりさし時不便おぼしかりとて何
が事しとてし所がめとありらん、品定銀ひよりて所がめよりさしあくはし

とて何の事とてさしあくはししとてさしあくはしとてさしあくはし
さしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはし
田家のまへの計へ来て自ら八郎の曹子にゆき一ゆきとて所供
ゆき書へありし所供の公とてさしあくはしとてさしあくはしとて
いふとてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとて
さしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはし
とてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはし
あきん知れ氏を次橋とてあきんは夫人後よりさしあくはしとて
相はせ一が秀家備前の國守とてさしあくはしとてさしあくはしとて
不君とてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとて
さしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはしとてさしあくはし
不領あり次橋長史何某と名あきんは唯明言母の事とてさしあくはしとて
おと一とていふ程なく道也の類あるとてさしあくはしとてさしあくはし

と信有り大山人は情を至し水と三抄を以て天を胸の中の苦と爲すを
うき車多き 東恩言河月の茶田は出陳取有て大山人とていと然の門
頭を至りて流るふり大坂は押寄の振を夢し流るる七日の曉大
山人は振を以て加賀利右の先陣に至りて由使ありと稱して大軍の中
とわけぬき思山を討取と色に味方と首を奪んとせしめし折捨て
思山は折入して十抄と名をあると一人折入して後者は首と取と門と出さ
るすあると思山は流るるを但馬士池田勝長と名を有て大山人の功を
と感しり色に我は石川をあると名を有て池田と首一つ折るるといふ
大山人は性急と刀の鞘をききみ付るうり大軍押寄せり色に又所
使ありといふり利右は流るるに討たる首と見せり折るるを車多
多事房守大山人と名を有てあると流るる利右は流るるを車多
利右の流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
所由の士首と名を有て大山人と名を有てあると流るるを車多と名を有てある

大山人は流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
説は流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
首と取る士三人有と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
果してあると 東恩言いふと所旗と後府は流るるを車多と名を有てある
かこれより思山は流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
と流るる大山人三十三軍の時と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
み後野但馬守長最は流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
系師は流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
諸候と名を有てあると流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
せらるる後比叡山の神鹿一乗有と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
十六人の像と名を有てあると流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
松平信長守信徳賀使といふ京都といふと流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある
大山人親戚といふと流るるを車多と名を有てあると流るるを車多と名を有てある

千間店と訪色より義慈元年七十歳まで三列の采の々々を故々をゆへへき志あり板倉重実よかくといつとも許さうーハ今うりき系那へ再びあしとふゆ糾つともあふじしとも奇あり

源ししが源兄の小川を源くとも花の波をわけとあじ

後光厳帝文山が録書よりきとすーなる木修瑠守は 勅命を供くらき

八卦の字と書て奉る 上皇とも又録字の大字と書せー光内肉と綴る

寛文十二年壬子九月廿三日一寺寺の開店小綴る九千歳とつりて詩集

と西渡時集と名づくくも世はつる

一乗寺れ第今ハ尼持の寺もぬさきともゆ他をきゆせり給儀と書や文山の
おの具湯又如意机など有とつり一説は文山名ハ寺之若き時をふたつと稱一後
たふとゆむせと源松重下のすい源松合戦の時大功と彫ーり色軍令は省
きらる罪は依て情もぬひなうとゆふ一ゆふはてを武門と離色と日校のゆふ
一寺寺村よせとすけゆ他をきと創し自のふく山人と号し山水花月子情と書む
陽のそと後き系とゆふ事と事と書 後水尾帝系と風流と書ーめーめめれ
ーやと固く源ーありてーかせんの小川の源くとも老の波つる多ハ和し
とゆふも憐みろーな心よあせよと勅つりしがゆは山寺の源くとも波と書と
唯書と下ーゆひーと書し初博高元生と道と書ゆひ屋山子杏庵玄同のゆふと
文り情とよく又又録書とくも世世人稱して寺中古本録書のをーめとん

寛文十二年壬子夏五月廿三日享年九十歳とて強ひる為人別とありて常あり
今と頼敏なるも亦人よとゆふ二年の時と書とよくあゆみ方とて成人の如く
歩けり十歳とては三十とて退き老ゆふつて孝と書し四十とて隠遁
の志と書くやうと書は系代の隠士といふしとつり

一板倉内膳正重矩の曰ゆ室と書ひる者と昔が監と名づく書つくくも

大なる監多し下り民の志あると揚べりて棄るき人のもとと書す非や

親族朋友もも書有と稱せりてあると書人のもとと書監の中と書と書た

る人き下の志と揚べりて職はありて天の命せらるる任なる人のもとと

監と天命れ任とかきゆ他の大ぬゆ書し人の志と書んやと書はと

心と書人し信らさうと又伯父月陽守の信らさうと人の生質さぬとあり

中よとる如の惣きもの有世無き人ともなと書言とありーさきよ

ゆふはゆかし現や書言といつとも強ゆふものこ又おひる人のもと

事とよめゆふと信らさうゆふものこ是ゆゆへき事とて又ありし信

重守老は戒らさしき格言と信らさし重矩ハと書一石名とて書は

かりしは新とて侯館の法と定りえ自の事と書了守らさし時の書

求むる事と事をおのづからあてまつる事とあり

重忠を修習し勝重の孫として鴻原を討死す一内膳重昌の子内膳守重
宗の甥として長びきくいのかえ若一りした賢者のやうであつて寛文二
年福一万石増賜して大坂の御代より後又一倍の禄を賜ふの執政の職を
任蒙らるるなり

一 板倉修賢身勝重を京都の諸目代つるに直侍の者杉平太衛作よく諫む
勝重彼が律義をわきまをわけて信用せらるる一とて勝重の人徳の所とす
身作徳とといふは勝重に前より勝重は徳あるものなりと謂ふをこれ
一は此の程よりとよめる者なり勝重これに海が作意うと問ふ事修賢は文盲
也何とてよみしや

はらき物事のふは琴れ系三奇が脚指ぬの所

と上の者が讀む程よりふと云ふは三奇と脚指ぬ細きおのこあれなり也
勝重悟之てを解と改さるるため太衛作が諫め此は輕い

一 觀世は通き諺を名とほる者之後刺殺して安休といひ諺は三病あり
のよきと惡のつよきと極子のまづうると此三事偏ある者多し諺はなり
どして止といふ教ぬは何せれ道より有べき事之を事とせむ者自ら
満りと自らいふとする者よりまじと不積工まといふざる者多し諺の
奥とせし難し

一 稲垣持邦を本多秀俊守忠政の士也法別は忍びて白書は暇路をお奔
し船をさくしに船をさくして其に教の念の中西は張付なり

破れぬ月をわけてきこころも天よりみのかみ

濃列大は怒てこれと進しむ進むの士坂敷を稲垣が舟とて河をかれが
稲垣も舟とて受ふるといふ二士と射殺し遁せり赤穂の商家より入
濃列の士十人斗を敵と闘めども時と後以て平右衛門輝興の城下なれば
其處に木梨清右衛門次郎忠雄と云ふやと服して直るの木梨ハ
以て是と云ふ稲垣の役する事なりとて射之は木梨木が唯中より

は中て僵る二矢をつづき又矢と射くらぬ腕より肩腰をうけ貫たり澤
村らさなづらみけく稲垣と斬殺しぬ木梨をぬき入て又獲る
遂に創と痛て死せり

梅より稲垣掃部上とみし不忠なる仕方なりといへば武常におもふべき者なり士
といふ處しあるの士といふとなく君といふとみねをきてとあるとおおきなる者なり有
といふは此稲垣の如くある武常となく人といふと世といふとあるとあるの者なり
神といふは此稲垣の如くある武常となく人といふと世といふとあるとあるの者なり
門首より稲垣掃部上とみし不忠なる仕方なりといへば武常におもふべき者なり士
といふ處しあるの士といふとなく君といふとみねをきてとあるとおおきなる者なり有
といふは此稲垣の如くある武常となく人といふと世といふとあるとあるの者なり
神といふは此稲垣の如くある武常となく人といふと世といふとあるとあるの者なり

一 落の身の消ぬことあるはこれなり何れなり何れなり何れなり何れなり何れなり
一 一の年々 將軍家門上落の時由緒を武常小普請と申人といふ供奉あり
其よりある鳥丸光廣卿の奇令は侍をて初秋月といふ歌のお作りなり
小普請あり

一 一とある柳のいと絶るより新さへ細き秋の三日月
光廣卿由緒をて何れと云ふ世歌の奇を止らさへ何れなり何れなり何れなり何れなり何れなり
是より續く奇をて何れと云ふ止らさへ何れなり何れなり何れなり何れなり何れなり

一 寛文八年六月有馬玄蕃政頼利が子豊氏十七年卒なり其室ハ松平
頼政身頼重頼の息也也今年二月末のうへ嫁ありしは六月の末の
うへまは別き悼の奇二首あり

うへまは別き悼の奇二首あり
うへまは別き悼の奇二首あり

悼有馬氏 水戸相公光国
十有七年胡蝶夢 醒未何處復逍遙
恨綿更不消 淡和薤露光秋此

一 願故時音をたぬの奇は
有馬といふのさる系玉の消て跡なき人といふ一記

隠世一と云ふ事久しき事家の流を慕する軒の出水

而して奇と爲る流石の文字よく重なる此後諸寺奇人の輩有之
寛文五年日光へ系圖献上し時分そ身の親父をぬ——と書し中々
一眉の奇と稱せし所、大猷院様は、中内威成を重く日光
に遷す此風流の事と云ふ所、此奇人

小南それと云ふ事、此奇人の奇なりき、末の奇人

大猷院様の所時をいふ事、此の風流も俗に云ふ上と云ふ所、此を中威成
の事、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、
此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、
此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、此の奇人、

教果てそ名を跡にのこす、此の奇人の都の奇の奇

一板倉重宗、京都諸代の時公と云ふ事、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、

且て謀人のいつり、此の奇人の奇、此の奇人の奇、

一重宗、再三賞し、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、

保料中將正之、此の奇人の奇、此の奇人の奇、

一佐川田昌俊、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、
此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、此の奇人の奇、

移り参じ山水を遊びまると方外を遊ばしむ壺翁又不二山人と云ふ松
尾少庵宗甫翁と友とし連字を昌琢法眼は修の書は松龍堂と云ふ
漢字をいふなり石山子とあり和号とてぬきて通名をいふなり中
院通勝々市平長哺ふも^{アウシヤ}鷗社と云ふ或時淀川の程を往来するなり
はいつであつともうゝを^{アウシヤ}鷗社と云ふ二つに牛の角をいふなり
程の字古仮名と云ふなり後世をいふなり
御返

魚の名れをいふあゝこのづらなりとて牛牯のつもの
おいのものなり
又不持の博の香炉と云ふ少は強る肘子言て「遠」寄^テ一爐^ニ尔相恋^ラ
心也螺甲沈水鍊^ニと云ふこづら此とて風流の文の書讀まはさるもの
多し春^ニといふあゝ昌後^ニある時よあるなり

すれは花のつみの娘なりと云ふなりとて牛牯のつもの
とて後陽成院の教説を入るは沛くさるをわしとしるる後寛文
の皇太后集お社と撰はる中よりて赤く震箱と深きなりと云ふ

連なるおめていふも長じたる事とある人昌琢は向ひてある時連なり
對する人誰とて昌琢西は柳のきありある昌後ありと
是ハ永井侯
いふなり下野ニ
在城の
ころに昌琢は^ニと云ふなり寛永二十年癸未八月三日病て終る享年
六十と云ふ墓を^ニ別恩庵^ニと云ふ^ニ一休^ニと云ふ^ニ院^ニあり

一大猷院柳門なる野好とて所供は大方石に云ふ墓殿を連なる云々墓殿を
移る佛供の墓者とし是故所意に入るとて或時後系ある所なる所
出は如三三商堂^ニ所入は如河後なる佛像の中は前物と背負する有れば
公方様前向と云ふ遊する「仏とぬと云ふなりや」き云々^ニと所
向あるありと上意有云々墓殿「嵯峨の秋也と云ふせんといふ所
と付らるる所降り十一の子世^ニ世^ニ馬は宗師成のとき横町にあり云々
とて所を衆おの色所成と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
ろとて馬の上を渡りて虚をなると云ふなり「るの上を渡りてこそ
ゆけと公方様前向と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

ようびのきゆるをけりて、ふくみき城下の厩城むししの地をゆびこ
し武蔵野より名ゆりし畠をけりて、後光よりゆりて、河はさるべき川
と此溝の流せ入水と度き野よりゆりて、後光よりゆりて、河の事ハゆりて
もや此水度野のみありて、後光よりゆりて、河の事ハゆりて、
又あらと云代官よりゆりて、後光よりゆりて、河の事ハゆりて、
極しものものゆりて、後光よりゆりて、河の事ハゆりて、
一、その年にも水来りて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
海が地の事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
床をよりし三、その秋大雨の流る地、雷の鳴る如く水音あびりて、
とてちきと此溝の事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
の流る事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
川名の川より流せ入りて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
地とゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、

なく重て溝を傾——かんじせき——事の神ゆはさるる若くして一階
の極ゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
利大矣、荆公喜甚、徐曰、策固善、以水何地、可名、劉貢父、又在坐中曰、
自其旁別、數金、八百里、湖、則可、容、矣、荆公笑、而、止、蓋、の、利、を、説、者、
也、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、
折亡の事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、

一、東家氏、初、開、一、重、大、坂、を、築、け、り、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、
一、重、大、坂、の、利、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、
差を流びし事ハゆりて、河の事ハゆりて、河の事ハゆりて、
くるとぞ

一新井白石曰、余又、喜ひし、人、は、向ひて、自ら、常、ある、物、の、利、刀、を、ゆり、て、
諸、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、
とて、ある、れ、後、光、より、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、
れ、さ、る、と、ぞ、と、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、河、の、事、ハ、ゆり、て、

ある者を押止めてよりやうも身とたつてもし事の何事かといふ人々
かくいふありきと信ぜらるる

一 上野國の士人の家、秘藏の皿二十枚有しとしそと破^レもの何れか一年とる
べしとせしひ傳ふ細事一瞬あやうそ一枚とつて一合の家を驚きおし
と裏に米と番附^{スエモ}とをうつけて我家は秘藏あると破る陶器と徒
に破る足つてを皿とを破るといふは益多とせしと男と唱へん
せし二十枚とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
きたり人々をいふとあきれをきき破る一枚破ると二十枚破る
るも同じく一命とめさるるを益我が破るといふは益らるる此
皿陶物なれど一破る皿と有べし細事二十人の命と我一人の命
とをいふつてのあはれ秘藏有と云ふを破るかくせんが爲と一寸
とごじろび主人の降りとつて主人降ると世に細をうつてそ義
常と甚感じ城主へしてす取とてらるる——がとて——と廉吏ゆへ

一 連奇師兼壽を兼藏の降る^連奇とてはどが岩目ら又奇を好まれ
別れ通来り山内とをらるる沙批判と文の中は兼壽の隨ふと好むる
とは是を連奇師の奇とていふと所感ある成る角自分より山内とを
故連奇師の奇とていふとある公家衆と戦て兼壽より中軍を
られ公家衆の奇とていふと山内内目とかけの奇

これより入相の降るよりやせん外山の極多つてより
ろ山内後山を候はる連奇師の奇とていふ兼壽めとていふと
伝作の故を候はる兼壽の奇とていふと山内内目とかけの奇
出し右の歌の奇とていふと山内内目とかけの奇とていふと
風と伝作の奇とていふと山内内目とかけの奇とていふと
を海よりみよとていふと山内内目とかけの奇とていふと
やうに山内内目とかけの奇とていふと山内内目とかけの奇とていふと
おしけるもそ方と好む上の白は入相の降るよりやせんといふけいハ

いふと云ふと知るやんね下のはは橋と中事いふぬ事とてあつて連
音の音を連部の子せあつて即ちさうなせも外山の橋と不けん即ち
はねの連部事と心知するに降い

佛後の卷の「撞接あり梅を橋とちる合点」
山の述る妙なり記「此句雖事誤用調可取」○能因邂逅山歌世人多為暮鐘時響
之意句句作詩極余思不然也蓋因遊金竜寺賞花遂巡至夕日暮鐘時響
花片自飛是景耳而感慨在其中矣安有鐘聲飛花之義耶史稔
因之歌真卒可以徵也如謂不然吾其俟千載之子雲矣

一 情愛抄の所人有て六七人はは捕り来る中は坊を一人有て内町を行き用
彈正左衛門の預りもはたき方きひと丸め方もて情愛仕る系松文不座
也元来医師の出家かと思ふに坊を中にも医師もあつたと思ふ
市井の秋多親を思ふの城主殿下は連部の執事役と勤王とて来る者ぞ
いふ浪人たるお果は付私と流浪人とおなり法世の仕るお果は付情愛大
仲る入湯薬と持運びゆと役事といふ一食を苦みいふと世と送りし
情愛と中事いふはなれやとやうに思ふに坊を中にも情愛仲

るの者いふは坊を中にもはたき方きひと丸め方もて情愛仕る系松文不座
也元来医師の出家かと思ふに坊を中にも医師もあつたと思ふ
市井の秋多親を思ふの城主殿下は連部の執事役と勤王とて来る者ぞ
いふ浪人たるお果は付私と流浪人とおなり法世の仕るお果は付情愛大
仲る入湯薬と持運びゆと役事といふ一食を苦みいふと世と送りし
情愛と中事いふはなれやとやうに思ふに坊を中にも情愛仲

一 宗廟の製棟細なる橋を深入とて町人竹樂のり下系橋とて来る者ぞ
いふ浪人たるお果は付私と流浪人とおなり法世の仕るお果は付情愛大
仲る入湯薬と持運びゆと役事といふ一食を苦みいふと世と送りし
情愛と中事いふはなれやとやうに思ふに坊を中にも情愛仲

橋を中にも情愛仲るの者いふは坊を中にもはたき方きひと丸め方もて情愛仕る系松文不座也元来医師の出家かと思ふに坊を中にも医師もあつたと思ふ市井の秋多親を思ふの城主殿下は連部の執事役と勤王とて来る者ぞいふ浪人たるお果は付私と流浪人とおなり法世の仕るお果は付情愛大仲る入湯薬と持運びゆと役事といふ一食を苦みいふと世と送りし情愛と中事いふはなれやとやうに思ふに坊を中にも情愛仲

家と流るの谷はよく耐へらんや

一 大石因能卿評也

あまうつる花と藤くらは浮つてをききあひ斗を庭の梅と枝
れとてや言の葉くさてもあう何のめとてあむさふらん

細井廣澤名を知らず者ありしものより文学あり画ありかく虫
の図エナミはうけるもの逸品あり且其術は通じて著述の才を深湛の才も
ありきば諸侯の才彩同と聞きし事とすや凡多能の人也といふ事
ある一話と聞く希徳の四十六士の月大高師吉とてみ流りしが師
を復讐言の孫も漢しんお入る車ひきあは書を授りて今曉るを果
さんといと告しや澤が家吉良氏の館はまさきよりやと他へ適ユクち
て門を主人志きば家の柱はせきとてそとを相とせやうと事ある
まぬとそとを以て陽るるありとて内へ入るを楊龍居て出居ゲイありし
る門をくく者あり心めて自らと明とれらんといふ大石氏とておまを

遊る世と流る服さーの小刀とぬきててみよとてあふ武林唯をも又おど
人けをしふ具ツクリは別と告てそを無き澤るるを流とてうてあふされ
廣沢は流人なりとらび自つて事を記しそかの形見とて一ツの玉は
流の封じしひめ玉とて後後子息は九年何やんとて置きえてわきし知れ
るにせしむるそを澤を流るる家室とて

伴善溪曰は信細井が相識は人なりキナリとて義士とてとて密謀とて
人よを信ののりきとてそを以て義士の子とてけりといふものなりと
の常とてそを以てそを以てそを以てそを以てそを以てそを以てそを以て
しそを用意振那の人なりとて他事とておほいしとて名利のこころは文雅とて
親の人とてあふさくみさるるもあふさくみさるるもあふさくみさるるもあふさく
て信義とてききりの人なりとて名を減ひとていひ流るるなりとて又い
ふ

一 小野寺重月秀和復讐のり東へ出つる時の事とて其入の起事とていふ
別せとて又あふねとてこのものもとてとてとてとてとてとてとてとてとて
又志望の満る

古きよりとてや人の役ありん楊をけき志うのうと松

娘の良き〜をさういふと

ふさふとれんあてなる大びの山とく〜 記の〜書

目〜一時ぬふりきこ

別色づく思ひの雲のこちさうや〜あも時ぬき〜未活の元
お〜まてふむ〜のサ〜と

う〜は娘と母。娘への数よりきなん身の内米即
又止せぬ都の〜との面影は道行人とく〜とぞる
又それ等の友達の〜くおれるき

あゝおはる娘の山内秋毎の多と別色し紐と〜
後世言の時名時名と金の紐冊は書て背まつけう世人と目どる

一の書はちばる〜

すきさやの〜娘とる〜として仕〜せこの君々懐紙

をきせ組十た又よ世禄の恩とよ〜し〜お徳が甚入の文と〜我者

娘の面はあ所家の娘より小身ながら百年の恩とをきぬ身あて〜
さ〜しゆ杯と〜紙也や〜衣するき二月三日の文は幸たあ事と心あ
思ひは〜し我は奇〜あま〜のさかし

迷じなる〜と〜は〜後世は心の〜とよふれ娘の月

死ぬべきまきばちんとあま〜ん〜思ひの〜この言は思ひつ
けし〜や〜娘はあ〜の雲のまきとあさきとる〜

武蔵〜あま〜とん〜の古人のい〜恒禄の〜とあま

凡居六士の詩歌連帳と〜一掌とる〜ものよ〜し〜大市井
のる好事の者の篇作と〜三宅氏とあ〜り世老の身とよ〜
き〜と〜の字し〜と〜せられ小説と〜え〜と〜
あ〜と〜ら〜の〜年日れと〜し〜は〜時と

定〜な〜と〜み〜寸松の〜と〜ある〜

炭〜と

と穉世のうゝと書自滅と記し世をみとめて死せるや

同記氏秀和姉と同女士大言源君の母なり是と云あり讀たりと云らる
源君より文より一よのたの女如くは恨を由歎きの色を思へさせらるる
おもしきしうゝるや其のさうもてんとむれゆんやと云ふつゝの所
かこいぬいふをきかいて思ふ切なりと云ふげなる由知るもあづかりの事
さして其の仕合未束の終びにうゝるさうもてゆんやあつたれ我を
見たりと才をす所と其の冥加はわけひくる事と云ふやと云ふ事と云ふ
さうゆさうその首尾何と云ふわけさせらるるさうもてゆんやと云ふ
と云ふと云ふ

一 赤穂の難は不義なりと述走り大野某が女東備振浦某と嫁に居るが
世生存の後何となく住居の裏の空地は隠居といふみる元来源の令
障よりと云ふしかりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

トゲ
遂て目と述べ世をみとめて人数の名と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
氏を思ふは是と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
疑ひ思ふは是と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
却るは是と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
一 なづと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
がと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あつたに云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
なりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
三人の子あきば彼等が供養せんきと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
中あつたに云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

妻を身は罪阿もあづる義よりてをさけしこれに彼も如き自らも
心能やうびとて一生ヤモウ環あり果さずしをめぐり庭路を緩歩せしむと彼妻
窺ひて言ひかたきいとも思ふととんと隣子杯茶けどもやがて走り入り
ぬ妻も後を追ひしむと避くるも世を採ミサホきし似るやとさき事成ぬ
とを隣國傳後の人垣平太郎の筆記にんぬ

一 新井君義年おれ時河村瑞見なる者よ如て面會せしむ世瑞見も志ある
者なれハ君災やぬ治して学業のなごころをさけきば瑞見も足
下モトヨハヒ秋ッる今も志とあらう学業れ為す死をべし志めさればいつて
学業成就する事あるやといふ君義世一言子憤イッ鬱ツし日に執学
不悔して後海内安ぬの学士となり寛永正徳の頃 君は龍遇せられて
出家す益ありといふ瑞見は字不徳の者といひても世矣見豪傑といふべ
——君災と改身世言を人々おぼせ——といふ

一 亦石の梁田ガシ悦富々怪なる者久しく消息なかりしが亦和をよみ

をせうりぬ中秋のひかりを

名は——あふみの浦はまむ人の歌憂——に秋の来れ月
とらんりゆる悦富を詩するあふ人なり色ど和歌ハカク海をうりし
は居——は如て和歌強てなりぬ

夏が——といふ来し人のうはをうりぬ浦の月とせり

悦富の息を五帝なる人のとめたりなり

一 然成先生和奇

寛文七未のひさる事あると吉野の山は深く住る人

は是き吉野の山の山人とありてこそを世にあらはるを
申のとし閑居して

ついで来て是き時代はかろくぬと人の心ぞむ——と世に
あらしは移るおもめの心と志して子島のこちをあらん

攝別泰山寺にて
るる人のこころのこころ山嵐のうき世の月の光をゆりて

一 仁壽天皇和奇

子幼はまゝきあつて事志げみ心の修す 花をかぐらひ

一 山崎園弁先生曰本邦の耶蘇は臨る者凡ては美なし靈英は室を
与へ我面と觀^キ觀^ユなるのたとひ生てき可く候す封をらる死てと帝の
お右は在るとも山豆は黨として我^ガ父母の国を危くすべけん武傷者
の孔盪と仰る事於彼が天主は能なるがとし然るども孔盪
の徒をし我面より冠とる人とも我^ハ錦^{ホノリ}何^ニ孔盪の徒と避^サ昂^チこれ
この義也

一 熊沢先生始て養樹先生はまゝ名へらるし時無任所

皆人の事。神は神をなし心の内より神をまゝと
いふも一に養樹先生は

ちとやぐ。神のやうき月をさやまゐる心の内よりうら

流るの養樹先生はうらとむべし是ハ養樹の末孫中江久風と云人のお

うらとむ

一 中井ト養樹先生は長守殿はけり中井入と云ふ中井の弟は長守殿
ト表は金子と取らんとし一に長守殿は長守の弟は金子と取らんと
思ひけりと云ふに長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと
表は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと

弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと

弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと
弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと
弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと
弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと

弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと

一 上方八幡の室は長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと
中井の弟は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんとし一に長守殿は金子と取らんと

巾着とさけてあんねんが江ノ棚借ゆて由るよ

思ふ處の
かたきある候
の色はく
人毎に
あつ
馬と
思ふ

らんさきハ子白と申元為居上は海めづりと何もありきハト長男建

一物茂卿は威者雷の全解と官一は對テ曰吾弱也古病氣の疾ありて
腹中なる鳴るるのきめ。程は何れの新と考へ其れ毎六十二を漸よれ知
るは病者の中なるいう疾やううそ鳴ると言ふも汁ひさし一代之神妙
陰陽の不測を吾未決して知りざると知ひとあや

一 稱日政字ハ元政ゆ子ト云ルハ不可思儀又恭宣も稱氏姓云々然平
安の人也六采ト云テ大ニテ書ヲ讀ムハ一ニ武事ヲ云フ事ハ云々
事ヲハシハ家ト云テ近江表根ト云々武事ヲ云フ又云ハ十三采城
白井伊妻君ト云故有テ母の氏ト云ナク石井俊平ト云ハ官のいふ
書讀ト云ハ格力人ト云終氏内外の二典ト云リ云々云々日本紀云
云々後藤ト云ハ隱遁を世ト云テ瑞光寺ト名ク来リて居ト云者あきハ
云々云々貴介云子といハ云々云々ハ意ハ或人續と供ト云々

擲ふらうと況んは後又母の命と寺の儀よりけり称心庵と名づけ
存念あるより年し又母年八十七とて終る母七十九なるびと身延少
信む事と告りきし一ふ師とまけくもまうづ世の身延紀あり
後母と又八十七果して終るを二七日う師像を痛くし終る紀
るを差もつて猶終るを達戒し自う曼荼羅と書し神子恵明は
附屬して法嗣と明く遷化の一日又母を養ふ大い法苑の首領
と書し終る世壽四十六寛文八戊申の二月十八日化を神世のあり
紀され山名は止むるの月うりあるとてさうなるべし
伴蒿溪云上人の詩をそ集あ色もろくし秀逸とあるなり又、
つきののち一うは証人
神料の里は信のせう後

山名は止むるの月うりあるとてさうなるべし
伴蒿溪云上人の詩をそ集あ色もろくし秀逸とあるなり又、
つきののち一うは証人
神料の里は信のせう後

くち果のちやとてさうなるのうりある谷れ葉と

三法門の水子のぼつて人ともふびきうなるあすくくながきて葉外
の波のうりある上人の詩とてさうなるのうりある谷れ葉と
世の中き誰とてさうなるのうりある谷れ葉と
同一く平の院とて

かなはるそとてさうなるのうりある谷れ葉と
むき一うなるそとてさうなるのうりある谷れ葉と
大いこれよとてさうなるのうりある谷れ葉と
折句のあはれとて

あはれしとてさうなるのうりある谷れ葉と
帰属

あはれし人の心とてさうなるのうりある谷れ葉と
あはれし人の心とてさうなるのうりある谷れ葉と
あはれし人の心とてさうなるのうりある谷れ葉と
あはれし人の心とてさうなるのうりある谷れ葉と

果菜藻水集續奇林良材枕詞燭明抄並葉名寄「多也高談云予
づるふらよ」とおぼゆる

つ野やゑのの志ける藤とらてあつたおのこはあつた
つひのつぎあつたつゝなな藤とらや何のふるさこの山

世立田の奇と名の桂川のあふ合ちるあつたつゝおのこはあつた
そをよとる人なけりとも思ひ捨て流すは流るるべしそのあつたの流は
代通記よりえり又季子拾遺曲に或説とあつたつゝおのこはあつた
そ流るの流はあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
奇の奇とあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
感し方おのこはあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた

一 偽契沖符室公俗姓も下川氏とえき直に蒲生郡なる瀬村伯氏
祖又たあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
師寛永十七年厄満するあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた

神の男子とらる十三歳後を難てる野山に登り移せらる自他宗の章疏
儒典詩文集はあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
白鶴の冥縁古記とよみ専ら国歌と好みて廣くそ書を撰む水戸西山
夷公長流と果つたりし百歳の位と世阿弥利本はあつたつゝおのこはあつた
又因く神とあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
中尾勘三郎と作つてあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
字の訓とあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
間と記し西山公その身見とよみつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
あつた白金十兩納三十疋と揚ひくそを帯ふ神即寺院の修造に充
つたあつたの者とあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
銅幣の古物眺望とし或る所とあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
紀氏と覇族と納ると説き公たれと讀みあつたつゝおのこはあつたつゝおのこはあつた

夢と夢と師と痛ある師と知るものありといふことと論じたる
昔人梅世師の歌学形法橋の説と様として古書と見明らかしもの
と解し凡そ昔人唯中川の流の説ありされど道の言はあべに
ありてあるとて傳へる道なりといふ説ありこれ世師は筆と透
ありて一事一語微とありてある中或るる及なくといふ
がうのと一ふひはさむけしとて是より改ていふ人といひてきけ
千載の一人といふ人も言ふありし詠歌を家集漫吟通く
刻につくよしなきハ唯と境界のあはしむる及氏のおせるとあぐ
山家のことなり

志きても如のうきはなぐさば風吹とちよきれ
山黒も曉も一もづくくふう月うのふも白ひく
山川の衆の心とちうもて屋を引ととあひてとむ
迷憶のころを

家こきき草の下あき一々雨のあきと誰うとるふ
山まきき草のあきと色ぬけとて人の情を解けとむ
世中此のあきとちうとむるのあきとむるは
二十九年のあきとむるは

我身いまみとちうとむるは
饒絶るといふ

やくとみておひの門をあしかど懐絶てき何ともなり
ほど長流のあきとちうとむるは又け作の全文ある古は

報味ありたきとむるは

或説は太極は契仲といふ人ありて和奇の言はまじし
不協の語とてしち人未だの義理を明するは舊文は徹とて後学の衆
とていふる多し故に千載の一人なりといふは
後世の衆とていふる多し故に千載の一人なりといふは
あきとむるは
やくとみておひの門をあしかど懐絶てき何ともなり
ほど長流のあきとちうとむるは又け作の全文ある古は

た情の癖あり契仲は家業のくせあり契仲は奇道の達人といふべし

一 荷田其満 阿豆万磨 姓を荷田宿禰とて相倉と氏と氏通名其満
洛南福島の初官なる家と嗣び才と主とし自き武家の復古を
仕と次神代巻百五集にあつて家業とぬき契仲と時を同じく
是ハ後世を彼説きとるべし契仲を佛者といふ人も人給
客よりとて派流せられたる人も世に一層 原 愈々て説をう
おふと元禄より諸道復古の運にあつた時とて武家ととの
契仲と其能くふくむる人もあつた又凡そ其能く
ちみこもその例にあつた浮沙のちみこ世の流るる
なといふところや又中世以後淫靡風をなるといふところや
瀬衣奇は祿をいふ家業とるるあはれよ世の歌と擇りてハそ
れと報するといふをたててとる事と報するものなり
仇むく相いハ巴提使にたぐてとる虎とつとちきめれとこれ

日本紀欽明巻の故事よりとて情色といふ者のもうごとく要すべし
よまじざる方とて其の金一

一 在満 満字是と又 通名東之進其満の姓也同く武家と唱ふ大寺の舎
具釋 同便衆等と若んて代故実のりよりとて考索の明なり
あつたといふと又又八福あり後世の弊とたててとるものなり
何と大とせり皆利未東とてとるは有て家業也又百人一首古説
とては人との例とて著せられたる又又公の武家の印なりと
満のうひ満はハとてとるなり其の事とて武家より其の
屋は仕しとてとるものなり已にとるものとて人々は其の
武家とてとるものなり已にとるものとて人々は其の
諸被りといふととるものとてとるものとて人々は其の
武家とてとるものなり已にとるものとて人々は其の
武家とてとるものなり已にとるものとて人々は其の
武家とてとるものなり已にとるものとて人々は其の

山といふとおぼしうといふ人俗色といふハそれおもしろい事是ハふと山居
立おて見おしつるぢきとてそそ美矣とす。無然としてふつうの心
を説くも何とてこれ作るもたゞ世奇を世有の儀なるが儀ものなき
ぢうなど湯あるふあうくそのちと傷うといふ處しきさきも何につけて
と大成と仕とせる由ある縁と闕も強解とす。やうく見ゆるも又
あの上と仇のぶといひて孔子とて談する事あり是も世の傷
士といふ其と稱し世これ非とぞてか。こゝよりさきぬとてむ品
きといさどめくるぢうべし是もさうその罪いふべうべ
皇神の内スノカミ恵はあきる國の靈シミなりされども又其例も甚しとて
魚しとてを病と茶せんは是もあきれきか。こゝより何のいふ事、あ
らん唯高のたひくぐとせとあづきのこゝ心校きの故う家字と興ふよと
おちるう生タマ國と仕として江戸は流る衆八十有餘とてよみこゝ門人うよ
が記しおける才すこゝ書といふ

其の日少とてててて

是よりさへあめれぐあうひ山草たるるちかみめと
はみせとて

故々乃其色をすれと首つが妹とてみせれ 茶味よりり

そは佐和と縣アガタと名つけるあまそ長月十三夜はよい

取のよれほぐくと天原なる月うけはかりなるきとて

あぐぬ乃芽チア生の露あきとて月をすまのち人

鳥島のうつゝ世のまひさぬり汲つあまそ落き月よと

あまそれをのほぐこひるこれ傳通院の室は海うでたる明らん

と一は増上寺へうつて大僧とてこゝちあうけうりてありとて

おちるはる山は茶の雲をけつたるま道とてかこ

を江のはやの中山の物も流て今ハ阿波う山獄といふとて山あり式

あむの神社あるこれなりとてと流る書くるもそのおのり

旅人ある事書つけり

東海を去るを望しむをこれあらむとて此の秋の初風

非を月計ありて

科野なる芳のあつのは花散るの如くとはふ吹ありて

又ふきほの音とあふをききて空をけりて

鳴るひく門田の風の月ともなくたれていづるむく花うけ

うつり多散るすそたたるな一草のいのちの春の明は

うきうきふきふきと潮もあつてききしやうちがしにほるそいと後の世に

さふしたる中とてきき潮とてききと唯あがせる世のさふものこもみ

つされし多かりとや老はあつてかるさふは茶の音のこもみでらに

きいとるーやもにうしきさうー人へあるやちーや高深云は老

の後のいあの色とすー人のねは入るー又若きやとは後の世のさふな

きは青ぬしの後のさふはふをけりてさふのたふるやあはれや

ききふき一草の音とて鳴るーけり中けりいあ詞人とおどろくをき

ききふきとてききぬるきき我もーとてのびもむ人多くよくとて

ぬるーと後とすきぬるききとてききぬるききとてききぬるきき

とてきき例の古言とてききぬるききとてききぬるききとてきき

又後詞とてききぬるききとてききぬるききとてききぬるきき

兼考そは是別記冠辭考そは祝詞解又後詞考そは後綴考そは

五巻そは是別記百巻新撰百巻解そは百巻百人一巻うひさるひ浄土三部

仮名抄言釋そはけり人の問はきき若き本行れきの解のきき

小冊は数部ありけり人の中後序百仮撰取魚表とてきき若きあり世

るききし人へ又偽ふきとてきき文章とてきき奇なりとてきき

後人碑文とてきき測若しとてききめきその家集持はる

一後通達を伊勢の人高田流の偽とてきき院家地は後綴とてきき偽偽と

きき感念しるきき感念しるきき一対書とてききけり衣とてきき

て知らず系へ登りしつゝ鴻ひる人の仮初なる世の卒日^{ヒツミ}一が後を思ふ
うがしこはゆるき唯一物とこそいふ明きも佛あるいふはきききききき
は奇事一もききききききききききききききききききききききき
がゆるして卒人の及ぬおありき今記^{ヨホ}なるこそつゝは卒

あつちの世のいふ人あること

忘きても縁はあるといふるなよききききききききききききききききき

あ人の弱穢とるる傷の贅

船々の鏡も今ききききききききききききききききききききききき

おしとやうとてお首流しききききききききききききききききき

世にえききききききききききききききききききききききききききききき

月よりききききききききききききききききききききききききききききき

丁のきききききききききききききききききききききききききききききき

人のきききききききききききききききききききききききききききききき

のうきききききききききききききききききききききききききききききき

枕る麻れうきききききききききききききききききききききききききききききき

海法師うきききききききききききききききききききききききききききききき

時きききききききききききききききききききききききききききききき

あつちの世のいふ人あること

あつちの世のいふ人あること

捨しきききききききききききききききききききききききききききききき

矢船のふきききききききききききききききききききききききききききききき

あつちの世のいふ人あること

あつちの世のいふ人あること

あつちの世のいふ人あること

あつちの世のいふ人あること

あつちの世のいふ人あること

まてし身は何の種ひをわけきる人の居と種まひのらん
これらハ名前の種く或る一糸也の身もてき御説よめり

うけて立雲をばめものごとえまて子るをある山の淵へを

安歌

あけ乃月あづかるる庭の面をあそく一なる木れをそまて

奥遊未央といふとて

言わうは桂まふとせ月とるん花の大井とけしのがんを
種より身も多かり一沢ののハ御説は力ある人なりしとも
人またよみらんまをそびきけくまてねしとるやうはあそき或人
を種しとてぬ人よかのまて或これとたわのめとて一とは
いふ事しとてひぬ記憶もつよく智な倫をそらまてし時おは
長き文脈とらふ唱らましはそ中書てはくといひし知事救
あそきねた一にあらけれはな月藏やまを一めハ泉民記々

の君の御もと立つて身のるひあそく一かとはとよしなまを
ひとと後まゝあらけき高溪或時戯きとてまて一の念心通世一
ては戸をてはるあそきとてやことまきゆあらは立つて身を
まひはあそびげなしとてつらまて法所あひてけをありあつて
一くそと一らひものどうまてまてあそきとてあそき時ひあそ
けとて野楓の種目たこまて一も身とこのむうまか一こま所あ
こまよりしとてきつひとていられしとて理りあそきつひと
年とて彼郷入道一はるはは暗病といつひあつて一は法所あ
らそましかそとて山づつはつけく一筆をゆしはつり
何とてきねのふしとてあそきとてあそきとて春もあつり
あそきとてあそきとてあそきとてあそきとてあそきとて
あそきとてあそきとてあそきとてあそきとてあそきとて
あそきとてあそきとてあそきとてあそきとてあそきとて
あそきとてあそきとてあそきとてあそきとてあそきとて

はるる

たてまつる衆の尾山の子願ハふ世を望むるはれなる即
入道殿甚賞し給ひ秀歌は是しかなしとなんのこまひあこせしや
さるは安永三年午卯月廿八日小幡若薨一はひは法師も寂り同
一年月日なりともあしく哀なる契なりき

一 隠家茂隆ハ江戸家士と隠遁なる人也隠家と梨本とともめ
ぬ橋とも名をたつるそよめなるこまよきをけきどそ隠家のもと
のこま書あやまるるやいと心持ぬ事のあるこまはこまの
かこれ家而首とそおしこまへともある奇とあつめるものあり
そそしめよおとるき

まむ庵と世の人のこま家といふはきこ

人こまぬまはゆすきはあつるこまといふともき隠家
梨本とあはえりそ庵の初は山梨の本られ

のこまこまはふ果しむのあは隠家つよ山梨の本

もよめ橋といふよしは深美豊といふ人のえり

隠家山ともいふ世とあつたりやうあるし本の棚橋

とよみとあこせなるはるる

つる庵と山ともいふ人たつるしのみじくこまを

といふよきとあつたりは人梨本集といふものと著しと判詞の類を

そよめ琴様は贈すべしとと為す凡そ道は古きと新きと

世人世の畧しと秦陳涉はひまぐしされはあふそ語と記す

梨本集と一旦はなして梓ののりかどその本世は流

布なる事一掃はあふ人勢とあつたりを序はいそく古今集

の記はあふ本よりあつる詞の中よりいづくの世をつみかく

あつたりとと名がきほさめなどやうの詞と不用をひさ

のみ人のつるあな^{モトナ}とけそかの歌又こまこまといふ

よき酒の品はなかりとて出で正月の茶会に伴物の代りたるを頼り
るなど制あるじとせばいふ事といふも僻言とあつても是非なし下
序文に於ける義論多く本文より直に制せしめて詞と題して例を引
きて判の詞となして一冊を判の詞の體より作る。詞はといふと皆新
古今の事のこととてとて代の事と用ひる。然るに今中世の事
の仕かゝる事此等なる事あるがごとく甚博識と云ふ事あるに
才の乏しき事と思ふあるや俗言とて又とて——きふとあれどそふ
振那のものかれども志ある人求てるべしとて著書の名目あるに
及ぶるにやと僻言とて又とて——と云ふ事あるに
和歌の事あるにやと云ふ事あるにや——と利未を著し著
時元禄十一年戊寅五月廿七句はありて未著の思と——と云
いふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ
と云ふことありと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ
と云ふことありと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ

見し

一 並河天民諱亮字簡亮を城南多田横大路の人と云ふ事あるに
あつていふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにや
天民を西家と云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるに
和代巻の文法と云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるに
於てあるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるに

つとむと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにや
と云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ
事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるに
升幸隆の寄車あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ

牛なづと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにや
是を源氏物語と云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるに
あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ事あるにやと云ふ

花^{ヲブ}裏^リぬつこゝまのやのさ面し、恋のみきいうも人月と憐るこそ思あをし
うらなといふ

一 隱士石卧を、あきふく、長野宗女と名のりて、高田修豆、守信幸、頼房は仕ふ
里、劔術の諸流を極め、自由の事、大なる結果をてたりし神を、あは立つて
道となふとも、釋教の学は、深く、奇極きとて、拒ひて、あきふく、あきふく、たりしが、後
あきふく、あきふく、記、勝也、しとて、東湖、釋、師、の、唱、ら、る、を、たりし

みよしのき梅のやと掌とよしあやつゆとて山とけりえん
人あそそ屋の梅紙

一本、そのまゝにこれだけつくやうな形を
とるもの

法師は遊蓮ユレンといふ和歌法師の法師あり冷泉為村々と同時の人なりてある
 しくねとありひーといふ法師或陽王俳人雅園のやうであるのひめを
 香かう盒ことて見るるや中へおとし煙立えんたてせらるるが心なるしきあるや
 あるじは罪なるひく

藻塩焼物屋の海士の仕業と二見の浦は燐のちり

ともみくあるしよきしきあるドもあある者なきは、
 少飲びて或
 播^{しく}伸^{しく}ある、然て香^{しく}合^{しく}ふ、き付てひみ^{しく}玉^{しく}ぬと、ふ^{しく}湯^{しく}蓮^{しく}を、
 仔細のきき
 前^{しく}は、あるせし、海^{しく}蓮^{しく}と、同く

一 小沢芦菴和尚とよくし能書の名師と着き時定家流の書と冷泉爲村
卿は學ぶつて今其の書を^{ヒツ}破^{フデ}り書あるの^{ソマリ}御と得たり今不快の氣也あ
つて使と芦菴よりわづら流と書奉ふれと禁止^{ヒツ}氏^{フデ}芦菴使
むむと^{ヒツ}流^{フデ}くそ罪と謝しそ使^{ヒツ}傳^{フデ}て^{ヒツ}所^{フデ}傳^{フデ}や^{ヒツ}ん^{フデ}と^{ヒツ}内^{フデ}入^{フデ}尊
ろう和^{ヒツ}あ^{フデ}と^{ヒツ}み^{フデ}經^{フデ}冊^{フデ}と^{ヒツ}さ^{フデ}う^{フデ}て^{ヒツ}使^{フデ}者^{フデ}は^{ヒツ}し^{フデ}ぬ^{フデ}使^{フデ}を^{ヒツ}經^{フデ}冊^{フデ}と^{ヒツ}る^{フデ}る^{フデ}は^{ヒツ}書
流と上代^{ヒツ}振^{フデ}は^{ヒツ}書^{フデ}あ^{フデ}ら^{フデ}と^{ヒツ}め^{フデ}和^{フデ}あ^{フデ}あり

あるべし和歌の浦風道たえて身を捨舟のよる方かな

使者持入りて中と卿は中上り色ハなのいさくされハハを芦屋
親小罪とせんとす大と解さる彼多ありといぞあぐ我下風は磨ん

やけ者後必居る和奇人といふは多しきと云ふは七士の言、
解るべき道は志厚く門人数多ありて名聲せしむるし其庵を考て
なまあり^{ガイシ}咳嗽ありと云

本町のしを吹きあり 福多おきあしむるむらう
和歌淵の國は野し

又玉を云ふ海の大やーいづこなるも和奇の浦浪
芦庵和奇入りの者おき六首の自海を以て教ふしるを云ふ
これ華を人の心の種なき思ひを述る所あるを云ふ
思ふ事いまだやまめや心なき事ある風は多しと云ふ
命をいふと思ふ人の心なき事あるを云ふ
あつぬ大強き心そ若くはさかーと云ふは道や世の人
いづれいひあひしきーは世の心をあきらめ、笑ふるを云ふ
これ世の心なきことと云ふ別つてはさういふことと云ふ道

此を解る心詞を以て事なぬ道のまがなりなり
あまやうん事を皆人の心とのころの道の一とし
或時ゆ法院、宮より道とよき

今めれし事は男りてきき屋のあつてり其の言
一高正岡号寂庵平肚後國阿頼大宮日三家の月高家の源より
紀伊の國は色色とて業と云ふ又西寺と云ふ
人唐の社を造るはつんとあつて古像を求るを云ふ正岡藏せ
る木の像阿頼が傳來せると云ふは甚だ急は^{カチ}慥にとて大に
賞を賜ふと有るはーと病なく自ら死を知り端をーと相ひ医師
の書きしを云ふ傳ふ^{一生不転の人なきは子なく}和奇集ハ一旦市以
といふ大の病なきと云ふと云ふ人の心なきことと云ふはさういふ
ことを云ふ

早雲 其の牛を色を雲ふと云ふは外のはなを云ふ理也の事なり

孫の重業の如く欣願する事なれども不承私事公為
我を西の方より遣作あるを知らず由上京以後別る所體はあつた
るが故に各ある由上京より下京に至る路重なる詩を^{多く}做
看多ク商量^を多クし中允角多ク所作は或上より或下より
商量の字え人とお説ある事と申す人も人とお説の字に計りて
とて以て心同く我々も思案ある事とも商量と申す俗話も人の
中事を取り思案とし申す事と申す中允の時ハ侍ニ我商量^を四語^を
とやれ和顔としを申す所は下京の時迄留中一時の申接授と
なりつゝも請も仰り申す上京とはつゝく申す所をせぐく我々
丈和顔と仕ふ中允申す所は一つおろしとて申す所は書付を
由月の中允より去るが故に^{中允馬の宛}古川氏^{後にも}など^等寄金^等の金と
いしするハ私をたへる事と申すハ私も是非^等と申すはく中允
侍とハ平仄なりと習是^等申すはく百人一首の詩^等をとりて

當ながらうらんつも場ハ明る中允とて奇とばとハ私に申す
ハ付允角古今をひとと讀みく奇とばとて是のりんやと我々に付古
今も通讀とヤ私を心と申す中允角百十通ハ昨日とてよみおれ
今どの積りよとてハ昨日の七月に十遍の教滿中允積り申す
申す老老とてしん又ハ圖^等をよむ宛鬼などとて一と申すはく可仕
振とて申すはくとて満中允角右子通讀漸くもけてるをよみ
かり中允角申すはく申す申すのけあきてのく割とて申す
さりとておとし事とて申すはく私最も申すはくある者もよく申す
かくとし私を治るも一奇事とて申すはく申すはく申すはく申すはく
ハ老人とてかく申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく
申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく
同志し申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく申すはく
ハ老人老老難堪とて及て申すはく申すはく申すはく申すはく

律
清

又一通

和歌よ西のやうよむとハヤがくニーらへ山と中山如世位ゆへも歌ハヤ

三月三日

多事多端

誠清

三秀院大和尚
觀音下

私心發露長卷一

一 亦爲山中馬丈孫無端なる者有り 何素の如閑和江ふあうと云此る丈。
馬は安ら色しるは道をしるは至きとも孫と衆馬の荷は肩といをて
親方あふなしといひてにまくなこの事をいといづる——子仕事なれを
あふまいうち色もかくするぞと問ふはおのをう親子四人は馬は肌をて
衣の命とけくともうハ馬は思ひて親方と思ひていさるると是を

病の令とけくさからハ馬とハ思ふハ親方と思ひていさるゝと答ふ

さて所傳はひとりの死ひあり世ありて清水のきみなりては流のりんすく念
と授けけりききとて色いといはれし事ありとうけがらるゝはとて
そはありて阿闍梨とてあるおろしおのきき水とてい馬とてい馬とて
てそ馬のおとひの下はうづくろりたよすもとうくさるゝかそ大は
能ひ又馬はあそひの死ひといふるを信實とて流しはるゝを流のりんす
とて此文とて解とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
馬のいふるを信實とて馬の事とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
るもとてあそひとてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
心ありき世ありては流のりんすく念とてい馬とてい馬とてい馬とて
んは信實とて馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
感とて信實とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて

伴蒿溪同曰凡馬狀如象而象稟性人又異なりといふも同く
天地間の蠢動佛認といふも法界の氣は也とてい馬とてい馬とてい馬とて

めの大なりといふも信とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
為る人といふも信とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
あそひとてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
天下は極し流ひし如きの氏といふも信とてい馬とてい馬とてい馬とて
い馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
い馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
つとしてこれとてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
をあらうとてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
小車れめといふも信とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて
とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とてい馬とて

々色と云ハる色かゝる色あるより也周果を志づゝくたきと惻
隱の意人なれど動きて物のごころつくるめんや畜類も物としそ
いそぬをいふて人よりとけるときありて中より外とを教し半
をけつと云ふときいふこと一に示るべきと古来其邦のうへへて
先王の禮とていふべきにききし中より齊の宣王の年とて後ハ譽
と痛ミ鄭の子產の生魚を放てしときと懐の思ふるときと
世の傷生やと云れども物を教といふは彼國の禮とては實に人
まじるのよしき也梁丘の粉餅とて三牲の象とて一を生物といふ
あひらとて亡れぬとて墨家の愛豈とていふや類とていふ
明の重初或人廟とあるは遠近とていふと太祖我祖と
る日此意とていふていひらきとて三代の禮とていふと目
ちれども國の發るはあひられ人をも神をも何ぞ梁主とのこと
うんや

一 佐久間文明曰夫遠古者邈不可言可言者堯舜禹湯文武周公
孔子也儒者謂先賢而信者也而其制治之初見者唐堯也
堯之治天下也拳拳於側陋試旃於百揆而遂讓天下是
舉業所由起雖安其世然萬世之亂階也其故何者惟其法傳
而拳拳者非其人也且三王更作崇愛更貴建明爭端斯
肇讒妒斯兆小人多善人少常也善人朋少小人黨多故善人多
不得在位小人常在位易相或以年改以月甚至以日後相者拳
前相之非欲更張以取稱譽故法日更改日紊偶與季後一賢百
不肖並進賢者常以避薛子為力小人者常以害賢者為力自
聖王在上則下常爭然聖王不常出雖欲母爭奚得哉故
居亂常矣矣舉業者其初志既在宰相人各懷覬覦之心人心
之動騷亂之本也是非舉業與貴變更之所致乎譬之拳業者
若天之下地之上浮中間甚逼人各謂獲上也天浼地不亂

而何^レ俟^レ焉管子所謂四民四姓各^ニ其業見^レ矣物^ニ而不移焉定^レ其心志^ニ之術有^レ故乎然則何以治天下也我邦^ニ神聖皇帝以知^レ聖賢不常出^レ故不取^レ賢能公卿大夫世祿官人世家決不取^レ諸於庶人除官以秩一建^レ純粹之法而使世々守之不變是以臣無^レ爭^レ心無^レ企望之心以不變更^レ政不文系雖君不賢臣不肖以一^ニ率^ニ遵^レ法後王之政先王之政也所以恒治安也^ニ以法^ニ以人^ニ之^ニ吳也法者常存人者不常賢^ニ所以我治彼亂也是以建制之超軼於彼可知矣彼邦建^ニ立刑之目^ニ加以^ニ答^ニ法^ニ維^ニ公卿大夫或斬之於市或^ニ尸^ニ之於朝朝授相^ニ名^ニ謫^ニ之夕^ニ與^ニ金紫^ニ朝^ニ答^ニ之條理煩冗纖法蛛網累^ニ手^ニ觸^ニ法^ニ搖^ニ足^ニ陷^ニ罪^ニ刑愈多^ニ犯者愈多^ニ其醜^ニ至^ニ宮刑^ニ谷^ニ我邦也公卿大夫罪不過^ニ竄^ニ銅^ニ庶人之刑二放逐^ニ與^ニ死刑有^ニ稍^ニ三^ニ差等耳且以公私二條判^ニ之犯^ニ公法者不赦私者暨^ニ小^ニ過者措^ニ不^ニ訊^ニ其^ニ祝^ニ威^ニ規^ニ之而已故刑甚^ニ矣^ニ不^ニ似^ニ彼邦一朝殺^ニ數十百人^ニ之慘^ニ之是刑罰之制超軼於彼矣^ニ它^ニ至^ニ討

昏喪祭之禮^ニ食飲器物之制^ニ咸勝^ニ彼^ニ矣要^ニ之我制貴^ニ於^ニ易^ニ彼制貴^ニ於^ニ密^ニ密^ニ簡^ニ易^ニ易^ニ從^ニ密^ニ密^ニ易^ニ情^ニ治^ニ國^ニ原^ニ不^ニ出^ニ此^ニ數^ニ條^ニ而^ニ悉^ニ軼^ニ於^ニ彼^ニ非^ニ免^ニ免^ニ之^ニ讓^ニ也雖^ニ者^ニ於^ニ愛^ニ民^ニ而^ニ大^ニ地^ニ大^ニ倫^ニ矣國君死^ニ於^ニ社稷^ニ況^ニ主^ニ於^ニ天下^ニ乎雖^ニ非^ニ受^ニ於^ニ祖宗^ニ之天下^ニ然^ニ下^ニ重^ニ器^ニ以^ニ天下^ニ以^ニ之^ニ敝^ニ蹤^ニ其^ニ存^ニ既^ニ往^ニ矣宜^ニ乎^ニ後^ニ世^ニ生^ニ企^ニ望^ニ焉^ニ惠^ニ民^ニ不^ニ如^ニ有^ニ常^ニ之^ニ大^ニ惠^ニ者^ニ小^ニ之^ニ有^ニ常^ニ則^ニ民^ニ自^ニ安^ニ而^ニ惠^ニ在^ニ其^ニ中^ニ矣^ニ以^ニ惠^ニ民^ニ却^ニ詒^ニ薛^ニ子^ニ千^ニ子^ニ歲^ニ大^ニ矣^ニ免^ニ之^ニ過^ニ我邦^ニ學^ニ儒^ニ者^ニ亦^ニ為^ニ世^ニ計^ニ或^ニ為^ニ識^ニ字^ニ聖^ニ人^ニ之^ニ道^ニ者^ニ治^ニ天下^ニ之^ニ道^ニ王者^ニ之^ニ事^ニ以^ニ治^ニ天下^ニ之^ニ道^ニ為^ニ生^ニ計^ニ其^ニ素^ニ達^ニ聖^ニ教^ニ是^ニ舉^ニ業^ニ之^ニ蟬^ニ流^ニ速^ニ我邦也文人詩人暨^ニ志^ニ博^ニ者何^ニ訊^ニ才^ニ稱^ニ儒^ニ者^ニ口^ニ說^ニ仁^ニ義^ニ說^ニ治^ニ國^ニ平^ニ天下^ニ見^ニ其^ニ行^ニ不^ニ掩^ニ其^ニ言^ニ行無^ニ過^ニ者^ニ六^ニ免^ニ常^ニ人^ニ凡^ニ俗^ニ不^ニ識^ニ一^ニ字^ニ而有^ニ謹^ニ言^ニ馴^ニ行^ニ者^ニ既^ニ出^ニ大^ニ言而^ニ與^ニ此^ニ侶^ニ為^ニ伍^ニ亦^ニ非^ニ可^ニ耻^ニ之^ニ甚^ニ邪^ニ且^ニ云^ニ我邦之治安^ニ由^ニ彼^ニ道^ニ之^ニ行^ニ矣^ニ不^ニ識^ニ其^ニ實^ニ而^ニ妄^ニ矯^ニ誣^ニ可^ニ憎^ニ之^ニ甚^ニ者^ニ之^ニ我邦^ニ入^ニ學^ニ者^ニ凡^ニ七^ニ八^ニ歲

而執師學法先素讀畢四書五經或止或聞講說少辨字義
雖長老之側說心法說仁義矯矯驕慢盡于眉間雖教風之所致
大不好之事也而非遂業蹙然更輒不趨弓馬劍槍或田獵或博奕
前所學者一朝而悉灰矣終以知角字比擬拱壁故世人以為童幼之具是
以倡之者一國而不過數人言之者不若其徒之外自公卿大夫至士庶人
言之者甚夥矣故其道也於我邦甚微焉非行也彼邦王者自幼
有師傅而教誨國有學鄉有師人各游泳沐浴其道也可謂厚之至者
矣是須恒保其養以莫傾壞固也然居亂十而八九易代以少數
焉而其終也變至為胡其道不行之邦者恒保養行之邦者曷如
斯壞也雖癡人女子猶辨識焉況格物致知者乎彼常云格物致
知格物致知者不知真格物致知否焉可為一笑而已彼既以百煉之
道不能支其邦矣得謂以其養分之一使治安乎我邦之治安
不可與彼同日而語也不藉彼之道炳乎其明如火矣孔子在世之明

猶不能以其道化人安時況以其糟粕乎雖然於彼國也尊信甚
教寔可也比我邦之教第二流而已我邦之教者以歌其道溫厚和平
六義之中五典自存焉不屑屑名義而名義自然行矣善明其政
迹自為教人傲而化矣其教不言與言之異爾我邦之制者素淳朴
彼邦之制者素虛文多淳朴者其標自誠實也素虛文者其標
自作偽也其所隔雖一間治亂之二途基于此矣春秋二百四十二
年之間弑君三十六滅國五十餘秦漢而下至元明弑君殺親害
子者谷計不可盡也所謂仁義之邦曷如此哉我邦之弘後亂三十
餘年天正前後五十年所是為最保平之間源平相拒不延歲月
如前九後三者以有憤於鎮臺盤據其封域以拒命耳非天下之
亂也上古維時有不逞之徒拒命不足煩一旅發刃決已亦以不延歲
月也故我邦居治十而八九是我邦非割治之至善哉儒云人之為人
者五倫暨仁義爾以之教人人被其澤是非我道輔治哉其言似是

然知以五倫仁義為中聖人之道殊不知我邦素以五倫暨仁義為教矣夫倫理者自然之道有人茲有此道非若異木異州之始末而滋蔓者地不訖我邦漢土雖夷狄亦有此道之建創之純粹與醜之吳耳周之時重九譯未獻者彼素非被聖教以有倫理之故感而來也是以可知我邦素以五倫暨仁義建創為請言其委曲儒道未我邦者肇於古備公云如儒之言也古備公之前者是亡教也以所生之邦為不如夷狄無情謂之何也神聖皇帝統御天下傳至于今是有父子之道也命令行百官有秩是有君臣之道也貴嫡子賤庶子是有長幼之序也百官和睦交際有伐是有朋友之道也建于支討日月統御有紀有冠昏喪祭之禮有宮室之制有衣冠之制有食飲器物之制一事々咸簡易大不似漢制之煩冗而迂也古備公之前果無教也莫異鹿猪之羣居何以得為國矣彼所宗之聖人之道者亞我神皇之教者

大矣夷狄之醜制然其道甚駁也何者至殷湯夏桀不道以下受命天極民為名起無伐之放桀於南巢泰然奪之天下至周武殷紂不道亦以下受命天極民為名起無伐之紂紂頭繫旃於白旄泰然奪之天下其為民實也使臣云君不道民不堪命恐顛隳祖宗之天下其孫讓於其地以某地為食邑也湯也擇桀之親戚立之歸臣位於亳武也幸有三仁之在擇其中立之而歸臣位於西周也名義與日月俱明矣若桀紂不聽孫讓則以兵安置諸於小國立其親戚而歸於臣位也名義等明矣然不為之顧奪之天下是以極民為名其實為奪天下也孟子不言子莫伊尹之志篡也以攝猶因其志不免篡况真奪乎於斯君臣之道始於兵踰牆穿穴者自居惡為惡湯武假美名而為惡其心劣穿踰者也可鄙哉論者云舜禹之以讓得也湯武之以伐取也子歸一矣人之無理一胡至于此乎夫治教之原者分善惡之二而

已不善善不惡惡也何由爲治也宜哉後世無道常居亂也固莫
善惡一定之分也以篡弑之人比旃舜禹所以道之不行也聞天爲
大惟堯則又聞天工人其代之未聞以篡弑爲天工則之孔子曰
天何言哉四時行焉百物生焉天者雖善生之然無心不可知之者也故聖
人懼之王者在上帝而育衆庶者也足以倣天之生之而言則已若湯
武之言似上帝者有耳目鼻口金冠玉衣而諄諄命之狀定诬謾天
甚者也又曰是所以聖人之爲聖人也以爲聖人之故爲之是不虛
妄之絕甚者也堯舜人也桀紂人也其行以爲至惡之事故號曰
旃聖人以其爲至惡之事號曰旃惡人焉弑逆者至惡之莫上者也
而反曰旃聖人也桀紂之惡者方湯武之惡也蓋曰旃賢人哉
以至惡伐惡孟子所謂以燕伐燕不如之也其行也至惡其名也
聖人何適從縱湯武之罪也辟言其親不善而一家爲之若甚其子
雖殺之可也又曰聖人以天下之心爲心立武庚錄父封箕子微子宗

廟血食非滅之也是亦不倫之甚者也天下之心聖桀紂而已非聖夏殷
之代也退桀紂立其親戚天下之心也其不善者非天下之心也
湯武完輯之功勞可觀也其識不及高氏幼子之見也人一日三食常
也已三食而供父母以一食奪也焉得謂養也封武庚錄父封
箕子微子不克一食也議論家曰某者小人亡論某者賢故論之
責備於賢者也是言寔然以此觀之湯武果賢而爲之也其責
殊重矣非後世爲篡弑者之類也然極口罵後世反聽湯武
是冠屨倒施也孟子亦云聞誅一夫之紂矣未聞弑君也是孟
子之私言已紂雖不道君也湯武雖賢臣已君臣者公名一夫非
公名也秦誓誨告之言不得如此不言非公言也孟子愈言之詳
力欲掩湯武之罪者也仲尼正名之言果非宗社至重箕子微
子侶相圖屏紂也宗社全而永爲周之天下然不爲之以其力不
足與或恐亂人臣之分之故也力不足之以人心未離也恐人臣之分

也雖臣親戚猶不爲之況武王乎況奪予其罪不容誅也楚莊王滅陳
也遂欲縣之而客一言之諫復之不取也可謂湯武者楚莊之罪人也
世之眩于湯武者以治民之可法也湯武之校點知不治不爲用也
治可謂詭譎之雄者否蓋返其親戚其不返者克己欲也淮南
子云夫獵之捕雉也必先昇體彌身以得其來也彼嚴恭寅畏夙
夜畏威者是體彌身以潤色譎也其詭譎出新莽之上者也莽
者奪來者也湯武者往奪者也其間亦若于莽也奪之後以仁治
民是亦一湯武也然以虐民遂敗智与不智之一間而已於其弑逆也
一矣假令有子堯万舜之治豈蔽弑逆之罪哉孟子行一不義
殺一不辜而得天下皆不爲之也者非聖人之品第乎以弑逆不
爲不義焉名義大廢矣宜乎周之諸侯傲湯武之轍弑逆猶稱
聖人况歆國乎於此彼彼欲相奪攻伐大起遂爲戰國鞠爲胡
服霜之敬言可恐哉是湯武施教於上而戰國受法於下也當周

之末孔夫子者懷不言之方傑出於其間一須筆誅湯武之罪以明大
義一洗道穢垢惜哉其意不出於此反謂祖述堯舜憲章文武
是以牛矢廁階珠非邪於此五典再斥矣立制之原雖以孝君臣之
道之爲重孝者教也君臣之道者制也無君臣之道不能爲國不爲國以
人不得立故君臣之道之爲重也君雖殺其親其子不得以爲讐君長之道
重也君臣之道既泯矣所以爲胡也是以我邦諸侯或不道爲其臣者
恐併家國失之或幽其君而立其親戚不獲遂其君而代立也儻
有代立之圖上聞其罪及三族幸以下其初不出弑逆之聖人君臣之
道分朋而不擾儻繼之禍亂胎胎于此之故也初大王以西伯之有聖
瑞欲立季歷以及西伯泰伯仲雍知之走荊蠻以避于季歷仲尼以
稱焉民不得稱泰伯之賢可知立泰伯也何害西伯之爲聖欲及西伯
者欲大門戶也既愛於二子使二子不得事父母其仁何處有
也叛心始於大王武王終之也於此父子之道再泯矣悲夫若堯



